国際日本学研究の模索

2011年9月28日
東京外国語大学国際日本研究センター

法政大学国際日本研究所
王敏

「国際日本学」とは？

- 日本のあらゆる文化現象が対象。歴史学、社会学、政治学、人類学、哲学、文学といった人間諸科学の多様な分野を学際的に取り組もうという「総合的日本研究」。
- これらの「日本学」を結びつけ、さらに諸外国の研究者の参与による国際的性格を付与することで、「日本学」総体に新たなダイナミックな展開をもたらすことを目指して、法政大学の提唱の下に立ち上げられたのが「国際日本学」。

- 「国際日本学」は日本文化をフィールドとする、学際的であると同時に国際的な、きわめて意欲的な学問研究の試み(共通性と独自性または地域性を整理・体系的に論じたい)。

- 日本と諸外国における日本研究の諸成果が、より多く直接交流し刺激し合って相互発信し、参照枠としての「日本学」を活性化させるとともに「文化」への新たな関心を喚起すると共に、継続発展可能の社会発展と精神的進化に寄与できる文化的視座の再構築をしていく。

「国際日本学」構築の背景
21世紀COEプログラム

- COE（center of excellence）＝卓越した研究拠点

「我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行うことを通じて、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的とする」

21世紀COEプログラムの構成概要

- 「大学の構造改革の方針」に基づき、平成14年度（2002年）から文部科学省の事業として措置

- 21世紀COEプログラム委員会（独立行政法人大学評価・学位授与機構、日本私立学校振興・共済事業団、財団法人大学基準協会の協力により運営）を設け、補助金に関する審査・評価を実施

- 平成20年（2008年）度予算は約39億円

21世紀COEプログラムの採用状況概要

- 採択件数 274／申請件数1395

内訳

・平成14年度（2002年）→法政大学・国際日本学研究
採択件数 113／申請件数464

・平成15年度（2003年）
採択件数 133／申請件数611

・平成16年度（2004年）
採択件数28／申請件数20

・平成17年（2005年）以降新規公募は実施なし

順	機関名	採択件数				補助金交付額
		合計	2002年度	2003年度	2004年度	
1	東京大学	28件	11	15	2	43億3930万円
2	京都大学	23件	11	11	1	33億7480万円
3	大阪大学	15件	7	7	1	24億6980万円
4	名古屋大学	14件	7	6	1	17億8630万円
5	東北大学	13件	5	7	1	19億5460万円
6	東京工業大学	12件	4	5	3	17億8060万円
6	北海道大学	12件	4	6	2	17億5450万円
6	慶應義塾大学	12件	5	7	0	17億5110万円
9	早稲田大学	9件	5	4	0	10億3730万円
10	九州大学	8件	4	4	0	12億6640万円
11	神戸大学	7件	1	6	0	13億8720万円

注：上位11大学、平成17年（2005年）以降新規公募は実施なし

法政大学の21世紀COEプログラム

- 平成14年度　人文科学分野
  『日本発信の国際日本学の構築』の採択
- 「異文化研究としての日本学」「日本文化の国際性」をテーマに掲げ、本学を中心とする国内外の著名な研究者が事業推進にあたっている。
- アジア、中国への重視

法政大学の21世紀COEプログラム
「日本発信の国際日本学の構築」

- 「日本」を国際的視野から体系的に見直すことにより、日本文化研究を通じた国際社会への貢献といったテーマなど、今後の国際社会における日本・日本人のあり方を再検討し、21世紀の国際社会の中で真に貢献できる創造的な人材の育成のための研究教育拠点形成を目指す。

- 平成14年に設置された国際日本学研究所、野上記念法政大学能楽研究所、沖縄文化研究所、平成16年度にスタートした大学院国際日本学インスティテュートで、事業に取り組む。

- 事業全体を推進し統括するのが国際日本学研究センター。

２１世紀COEの継続発展を
≪異文化研究としての「日本学」≫

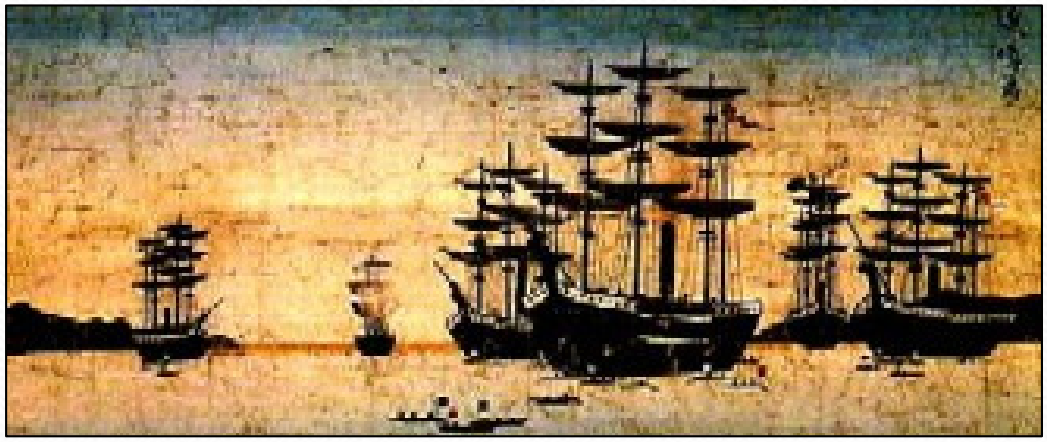
- COEの遺産を受けて国際日本学研究が≪異文化研究としての「日本学」≫に集中して研究を進めている。
- 2007年度～09年度、文部科学省高度化推進事業（学術フロンティア）の支援を受けている。

法政大学が「国際日本学」を提唱

- 背景

日本の人文学は

全体として鎖国状態



日本語版

法政大学
国際日本学研究センター

国際日本学研究所

Hosei University Research Center for
International Japanese Studies

2002年
法政大学「国際日本学研究所」

- 世界各所で行われている日本学を結ぶことを目指している。
- 2005年以来、年に一度、共通テーマを掲げて国際シンポジウムを実施するなど、主にヨーロッパの日本学研究者たちと、自他の違いを敢えて意識した、継続的な共同研究を展開している。

●ニューズレター No.9

●ニューズレター No.10

国際日本学研究所
四つのサブプロジェクト(2009年まで)

1. 異文化研究としての「国際日本学」の構築(理論構築)
2. 異文化としての日本(東アジア、中国中心の日本研究)
3. 日本の中の異文化　(沖縄中心)
4. 電子図書館システムの構築

サブプロジェクト①
異文化研究としての「国際日本学」の構築

- 異文化研究には、対象となる文化を、異なる意味コードを跨いで翻訳する作業が不可欠
- 国際日本学は、翻訳を新たな価値を生み出すものとしてみなす
- 異文化研究の中心的作業をこの翻訳とみて、翻訳の積極的意味を、実例を用いて探る

サブプロジェクト②
異文化としての日本

- 中国文化、韓国文化、日本文化について、相互に異文化としての質の差異を見極める

- 同質といわれる東アジアにおいて異質を探り、異質の文化としての相互理解を模索する

サブプロジェクト③
日本の中の異文化

- 日本文化については単一性が言われるが、本当にそうなのか？
- 琉球諸島、東北、北海道など日本の辺境地域に異文化を探り、日本文化が多様で重層的であることを示す
- 内からも異文化研究によって日本研究を開いていく

サブプロジェクト④
電子図書館システムの構築

- それぞれのプロジェクトを支える研究・研究者情報の共有のデータベースの整備と構築が不可欠

- 例1. 北方史総合研究文献目録データベース
- 例2. 日本古代史関係研究目録データベース

サブプロジェクト
②異文化としての日本

- チーフリーダ　王敏
- 東アジア文化研究会(月1回) 開催
- 研究論文集(年1冊)の発行

サブ・プロジェクト②のコンセプト

- 一つは、外国の日本学研究者（＝他者）の視点を取り入れて、日本の社会文化をより重層的、多元的に認識、理解、研究するための「ジャパン・テクノロジー(日本学)」の再構築である。

- もう一つは、他者の視点による「異文化」という観点から日本の社会文化を再発見・再発掘し、西洋発のグローバル化に対して地域性の可能性を示し、文化多様の共生ケースを探りたい。

サブ・プロジェクト②の研究課題 ３年計画

- 2007年度　日本文化への問いかけ及びその解題
  …その1 「外(東アジア)」の視点
- 2008年度　日本文化への問いかけ及びその解題
  …その2 「内(日本)」の視点
- 2009年度　日本文化への問いかけ及びその解題
  …その3 「内外の視点を相対的に検討し、認識の深化を求める」相互学習の視点

2010年～2013年・国際日本研究所の企画
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討
ー＜日本意識＞の過去・現在・未来

- 学際的かつ国際的な日本文化研究
- アプローチ①「＜日本意識＞の変遷ー古代から近世へ」：日本文学、日本史学、日本思想史学。
- アプローチ②「近代の＜日本意識＞の成立ー日本民俗学・民族学の問題」：民俗学、民族学、文化人類学。
- アプローチ③「＜日本意識＞の現在ー東アジアから」：アジア学、日中文化論、異文化コミュニケーション論。
- アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量ー未来へ」：国際日本学、文化人類学、哲学、社会学、宗教学。

- アプローチ③：東アジアというリージョナルな枠組みの中で、現代における日本文化の可能性と問題点をより明確にする。ローカル文化の一つである日本文化は東アジア各地域において、参照枠として、商品・広告・生活様式などに多様に影響を与え浸透している。結果としてそこではローカル文化の相互浸透を超えて、リージョナルな東アジア文化としてのハイブリッド化も生じてきている。その実態をも調査し、研究する。
- 目的：日中漢文化の間に見え隠れしている相関関係を浮き彫りにすることで、現代日本文化の東アジアにおける可能性及び貢献の度合いを解明する。

アプローチ③の自己目標

- 研究目的と方法論：

アプローチ3は、これまで本チームが長年取り組んできた「国際日本学研究」の一環である「異文化としての日本研究」の確立とその方法論を活用した、時代の変化に応答できる「異文化・外部」の視点を取り入れる総合的日本研究という主旨に基づき、これまでの研究姿勢と成果を発揮させていく方向に位置づけられる。

異なる文化背景におかれてある日本研究による相互の発見と、認識、学習、研究が、国家体制の差異などによる異なる価値体系を知り、学術摩擦の原因を見極め、研究の互恵関係を樹立し、双方にとっても発展可能のケースを共に培養させていきたい。「異文化」の「風土」における「日本意識」の再検討と共に、その建設的貢献の意味を再確認しつつ日中、東アジアへの平和構築に広く活用できる「応用」型研究を志向するものである。

研究内容：

東アジアの変化と日本研究に求められる対応
～「日本意識」の現在に据えて～

- 2009年に鳩山政権が「東アジア共同体構想」を宣言して以来、国内外における東アジアへの関心が一段と高まり、**結果的に東アジアにおける「日本意識」の検証が行われる機会**にもつながることになっている。
- 東アジア地域の歴史的・文化的な歩みを考えると、まず文化圏として定義された古典東アジア、続いて西欧植民地圏としての近代東アジア、さらに第2次大戦後の冷戦によって分断された東アジアになる。そしていま、グローバル化のもとで平和的・発展的な東アジア再構築の段階を迎えてきた。
- 本研究は現在という時間軸に据えて、東アジアにおける日本意識の輪郭を垣間見つつ、そこから相互理解への通路を広げようとする問題提言を目指している。

2010年度の研究内容:

- 2010年では、アジア主要国のインド、韓国、中国における日本意識の現状について、それぞれの地域を代表できると思われる研究者を招いて、学習型研究報告会を開いた。その際、現時点における各研究者の関心テーマを中心に、研究報告をしてもらう。さらにそこから参照枠としての日本意識を抽出し、認識深化の一助となる視点・論点を整理してみた。

2010年度の収穫

- 異なる政治背景はその地域における日本意識を把握するベースである
- ヨーロッパを参照枠に浮かんできたもの：東アジア地域に儒教的価値基準の実在
- 地域発展を目指す研究形態の可能性
- 経済「格差」の動力という特徴
- 日本の自己認識が重要
- 日中の文化関係を反映させている台湾の研究成果
- 日本意識の変容に注目
- 東アジアの共通思考は根強い

課題として

- 東アジアを根幹に据えた多岐にわたる調査報告により、あらためて日本とアジアの相違点、価値判断基準の違いが認識させてくれた。一方、例えば東アジア文化圏発展の鍵を握る「漢字」一つをとってみても、いまや強力な統一要因として働き始めている。古来漢字を吸収した教養、歴史、生活などが、東アジアに普遍的に内在することをも再認識させてくれた。
- グローバルな時代を迎えたいま、東アジアの共通性と西洋的価値をどう共存させていくかが今後の課題となるであろう。また、日本的価値と東アジア諸国との共有問題も真剣に取り組まなければならないであろう。

2011年度の研究内容：

急速に変化する中国社会を具体的な実例として、「日本意識」の過去・現在・未来に関する調査・分析を行う。より現実社会に即した研究成果を重視し、フィールドワークに基づく調査と最新事情の分析を研究における最大の特徴とする。

- **2011年度の研究会報告者及びテーマを具体的に：**
  中国・南開大学日本研究院の創始者楊棟梁教授主編、世界知識出版社に発刊されている『日本現代化歴程研究叢書』全10巻をテキストに、学内外の研究者に一冊づつの査読を担当し、その内容を総述、整理、日本研究者の研究成果との比較を並行して報告していく。

法政大学国際日本学研究所 戦略的研究基盤形成支援事業
「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討－〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ③ 「〈日本意識〉の現在－東アジアから」
2011年 第4回 東アジア文化研究会

対日警戒論の歴史的脈絡をたどる

―米慶余『日本近現代外交史』を読む―

（報告概要）

該著は幕末維新から現代まで，日本政府の公式資料に依拠して，客観的に日本の対外政策決定過程を跡づけようとした労作である。全15章のうち戦前・戦中を9章が，戦後を6章が占め，戦後については著者以外からの初稿から成るものであるが，視点はほぼ一貫している。本書は日本の対外政策の範囲を東アジアに限定しており，ヨーロッパ・アフリカ・ラテンアメリカなどの地域についての外交についてはほとんど論及されていない（著者もそのことを後記で断っている）。そのことで，戦前・戦中においては東アジア（とりわけ中国）に対する拡張主義・植民地主義・対外侵略の政策決定過程を明らかにすると言う視点が明白に打ち出されている。戦後においては，東アジアに対する善隣友好外交を打ち出しながら対米同盟基軸による大国化路線が顕著になっていく政治過程を明らかにしようとしている。本書を通して，日本の「大国化」に伴う対日警戒論の文脈の形成と変容の歴史的過程が，おのずと浮かび上がってくるように読める。報告会ではいくつかの歴史叙述の事例を取り上げ，依拠した文書・先行研究や論述の流れを踏まえながら，現代の中国歴史学において日本政治をどのように評価しているのか，その特質について論じてみたい。

■報　告：　**馬場　公彦（ババ　キミヒコ）**
（株式会社岩波書店　編集局副部長）

■日　時：　**2011年 7月 27日(水) 18:00 ～ 20:00**

■会　場：　法政大学市ヶ谷キャンパス　58年館2階　国際日本学研究所セミナー室

■司　会：　王　敏（法政大学国際日本学研究所　教授）

■ 申込方法:　下記アドレスの申込専用フォームからお申込みください。

PC用　https://www.hosei-web.jp/fm/10120.html　携帯用QRコード

連絡先：法政大学国際日本学研究センター事務室
E-mail: nihon@hosei.ac.jp TEL: 03-3264-9682 FAX: 03-3264-9884
http://aterui.i.hosei.ac.jp/

東アジア文化研究会の一端として

日中相互学習を目指し、学術交流の進化が期待できる活動として、２００６年７月から日中文化研究会（2007年10月から東アジア文化研究会に改名）を50数回開催した。

法政大学国際日本学研究所　2006年度　研究会一覧

	日程	報告者	肩書き	報告テーマ
第１回	2006. 7. 3（月）	李　国棟	広島大学外国語教育研究センター教授	対称性の創造－詩の世界から娑婆の浮世へ
第２回	2006. 7. 22（土）	三潴　正道	麗澤大学教授	典型事例から探る日中異文化コミュニケーション
第３回	2006. 8. 23（水）	西岡康宏	東京国立博物館副館長	中国・日本美術の特質について
第４回	2006. 9. 12（火）	スティーヴン・Ｇ・ネルソン	法政大学文学部教授	９世紀の日本と中国 ― 藤原貞敏の渡唐に関する記録から読み取れるもの ―
第５回	2006. 10. 11（水）	崔世廣	中国社会科学院日本研究所日本社会文化研究室	日本的社会構造の特徴を探る ――中国的視点から見れば

第６回	2006. 11. 1 （水）	高橋優子	文化学園専任講師	日本人と中国人のコミュニケーション方略に関する一考察 －謝罪という側面から
第７回	2006. 11. 29 （水）	楊 暁文	滋賀大学国際センター助教授	豊子愷と厨川白村－『苦悶の象徴』の受容をめぐって－
第８回	2006. 12. 20 （水）	谷中　信一	日本女子大学文学部 教授	日本人の伝統倫理観と武士道
第９回	2007. 1. 24 （水）	玉腰　辰己	早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士候補生	日中映画交流史のなかの日本映画人 －川喜多長政と徳間康快の対応－
第10回	2007. 3. 24 （土）	植木　雅俊	仏教研究家（東方学院所属）	仏教受容の仕方についての日中の比較

法政大学国際日本学研究所　2007年度　研究会一覧

回数	日時	報告者	肩書	テーマ
第11回日中	2007.4.25	曹大峰	北京日本学研究中心教授	「対訳コーパスと多文化比較研究——言語と翻訳の研究例」
第12回日中	2007.6.20	李廷江	中央大学法学部教授	「中国における日中研究の展開——日中関係との関連で」
講演会	2007.7.9	加藤周一		「日本文化再訪－多文化主義について」
第13回日中	2007.7.25	千石保	財団法人 日本青少年研究所所長	「日中高校生の生活意識」
第14回日中	2007.8.8	魏大海	中国社会科学院外国文学研究所教授	「芥川の『支那遊記』論——章炳麟とのギャップを中心に」
外国人客員研究員研究会	2007.9.7	楊偉	法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員・四川外語学院日本学研究所教授	「中国における「惜別」の受容から中日文化を見る」
同上	同上	霍建崗	法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員・中国現代国際研究院日本研究所助理研究員	「共同体の視点から日中の政治を見る」

第15回 日中	2007.9.19	光田明正	桜美林大学孔子学院院長	「漢文明と日本――日中の違い」
第1回 東ア	2007.10.26	田中優子	法政大学社会学部教授および国際日本学インスティテュート教授	「国際江戸学と江戸アジア学
第2回 東ア	2007.11.14	曽士才	法政大学国際文化学部教授	「日本華僑社会における伝統文化の再構築と地元との関係」
第3回 東ア	2007.12.12	武井一	東京都立日比谷高等学校	「高校生が第２外国語を学ぶ意味（韓国語を中心として）――高校生の視野の拡大と文化理解」
第4回 東ア	2008.1.25	李文茹	台湾慈済大学	「台湾における日本文学の受容と研究の現状」

法政大学国際日本学研究所　2008年度　研究会一覧

回数	日時	報告者	肩書	テーマ
第１回	2008.4.28（月）	伊藤亞人氏	琉球大学大学院人文社会科学研究科教授	「日本社会・日本文化の周縁性と特異性」
第２回	2008.5.14（水）	赤坂憲雄氏	東北芸術工科大・同大学東北文化研究センター所長	「青潮文化論は可能か」
第３回	2008.6.6（金）	小倉紀蔵氏	京都大学大学院　人間・環境学研究科准教授	「２・１・０－東アジアの文化・文明論的構造」
第４回	2008.7.7（月）	徐興慶氏	台湾大学文学院日本語文学系教授	「台湾における日本研究：日本文化史研究から考える」
第５回	2008.8.1（金）	小針 進　氏	静岡県立大学国際関係学部教授	「韓流をどう位置づけるか」

第６回	2008. 9. 18（木）	劉　建輝氏	国際日本文化研究センター准教授	「支え合う近代～日中二百年の再検証～」
第７回	2008. 10. 10（金）	辻本雅史氏	京都大学大学院教育学研究科教授	「思想史研究における『知の伝達』とメディア―江戸思想を素材として」
第８回	2008. 11. 11（火）	西原春夫氏	アジア平和貢献センター、早稲田大学名誉教授・元総長	近代日本のアジア侵略　―その歴史背景を大きな近代史の流れの中でとらえなおす―
第９回	2008. 12. 3（水）	代田智明氏	東京大学大学院総合文化研究科教授	社会主義という資本主義的社会と資本主義という社会主義的社会―中国文化と日本文化―
第10回	2009.　1.16（金）	法政大学国際日本学研究所・東アジア出版人会議	基調講演、市村弘正・法政大学法学部教授 参加者は、報告者を含めて30人余	東アジア読書共同体の構築は可能か？

法政大学国際日本学研究所

2009年度　研究会一覧

回数	日時	報告者	肩書	テーマ
第１回	2009. 4. 22 （水）	岡本真佐子氏	桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部教授	国際文化交流の評価研究―異文化理解の手がかりとして―」
第２回	2009. 5. 19 （火）	佐藤保　氏	お茶の水女子大学名誉・学校法人二松学舎顧問	漢文力と日本の近代
第３回	2009. 6. 12 （金）	藤井省三 氏	東京大学文学部教授	東アジアにおける「阿Ｑ」像の系譜：夏目漱石、魯迅そして村上春樹
第４回	2009. 7. 7 （火）	周　程　氏	早稲田大学孔子学院副院長、留学センター客員准教授	中国は日米を追い越すか？―科学技術力視点から見る中国発展の可能性
第５回	2009. 8. 4 （火）	王秀文　氏	大連民族学院学術委員会副委員長、国際言語文化研究センター長	文化の特質と異文化コミュニケーションの必要性 －共生・共存・共栄の国際社会
第６回	2009. 8. 20 （木）	謝　宗睿 氏	法政大学国際日本学研究外国人客員研究員、中国国務院発展研究センターヨーロッパ・アジア社会発展研究所助理研究員	日中交流の新世代・「８０後」 ～『ほんとうは日本に憧れる 中国人』の検証～

事例　2008年度　東アジア文化研究会概要

- **第1回東アジア文化研究会**
- テーマ:「日本社会・日本文化の周縁性と特異性」
- 報告者:伊藤　亞人　氏　（琉球大学大学院人文社会科学研究科教授）
- 日　時:2008年4月28日（月）18時30分～20時30分
- 場　所:58年館 2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司　会:王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

秘書室

- **第3回東アジア文化研究会**
- **テーマ:「2・1・0－東アジアの文化・文明論的構造」**

- **報告者:小倉　紀蔵　氏**
  (京都大学大学院　人間・環境学研究科准教授)

- **日　時:2008年6月6日(金)18時30分～20時30分**
- **場　所:市ヶ谷キャンパス**
  58年館2階国際日本学研究所セミナー室
- 司　会：王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

報告者席

- **第4回東アジア文化研究会**

- **テーマ：**
  「台湾における日本研究：日本文化史研究から考える」
- 報告者：徐　興慶　氏
  （台湾大学文学院日本語文学系教授）
- **日　時：2008年7月7日（月）18時30分～20時30分**
- **場　所：市ヶ谷キャンパス**
  ボアソナードタワー25階B会議室
- 司　会：王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

報告者席

- **第5回東アジア文化研究会**
- **テーマ：「韓流をどう位置づけるか」**

- 報告者：小針　進　氏
  （静岡県立大学国際関係学部教授）
- **日　時：2008年8月1日（金）18時30分～20時30分**
- **場　所：市ヶ谷キャンパス**
  ボアソナードタワー26階A会議室
- 司　会：王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

- **第7回東アジア文化研究会**

- **テーマ:「思想史研究における『知の伝達』とメディア**
  ―江戸思想を素材として」
- 報告者：辻本　雅史　氏
  （京都大学大学院教育学研究科教授）
- **日　時:2008年10月10日（金）18時30分～20時30分**
- **場　所:市ヶ谷キャンパス**

ボアソナード・タワー25階B会議室

- 司　会：王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

- **第8回東アジア文化研究会**

- **テーマ：近代日本のアジア侵略**
  ―その歴史背景を
  大きな近代史の流れの中でとらえなおす―
- **報告者：西原　春夫　氏**
  （アジア平和貢献センター理事長、
  早稲田大学名誉教授・元総長）
- **日　時：2008年11月11日（火）** 18:30～20:30
- **場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　80年館7階大会議室1**
- 司　会：王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

報告者席

- **第9回東アジア文化研究会**

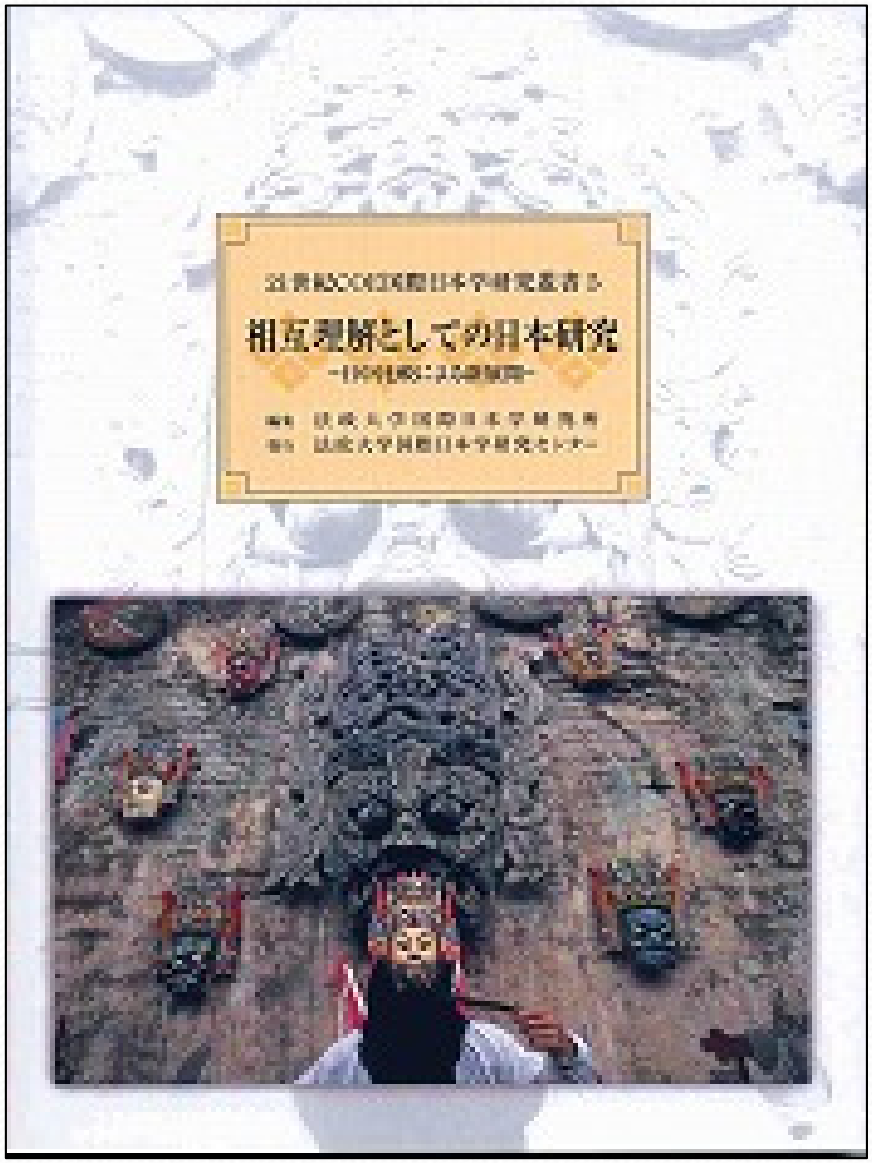
- **テーマ：社会主義という資本主義的社会と**
  資本主義という社会主義的社会
  ー中国文化と日本文化ー
- 報告者：代田智明　氏
  （東京大学大学院総合文化研究科教授）
- **日　時：2008年12月3日（水）** 18:30～20:30
- **場　所：法政大学市ケ谷キャンパス**
  ボアソナードタワー26階A会議室
- 司　会：王　敏（法政大学国際日本学研究所教授）

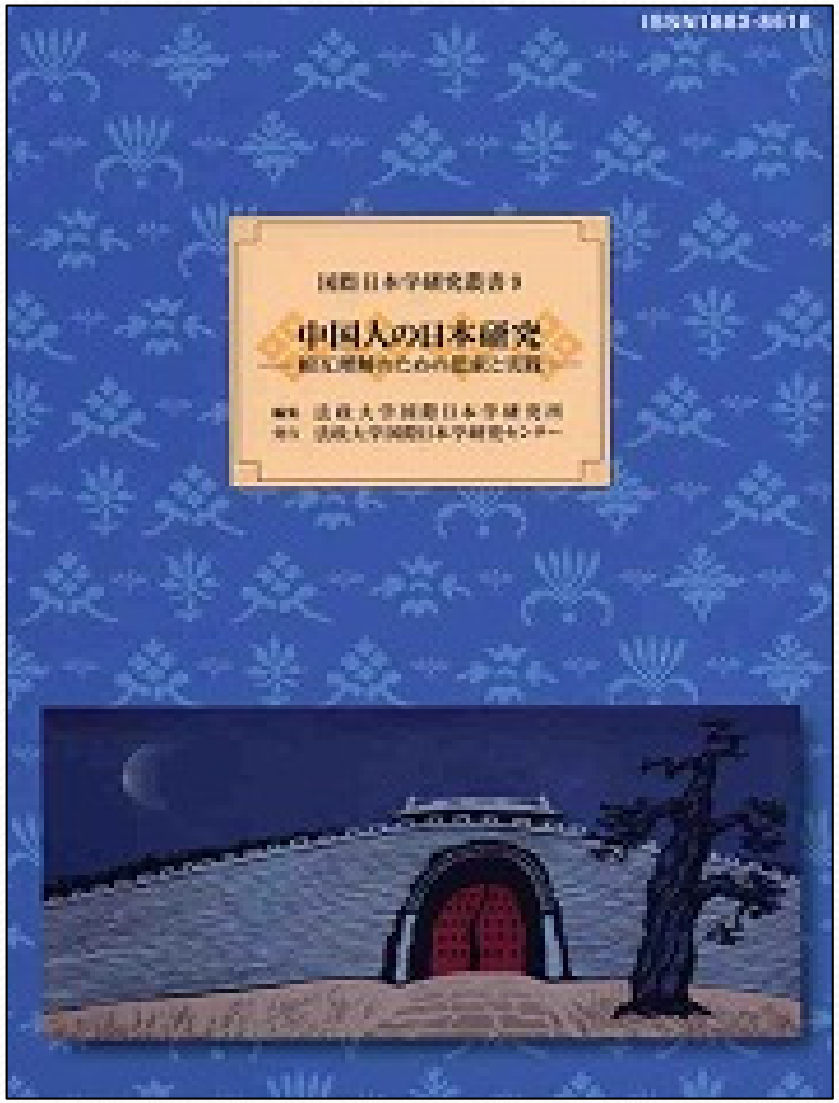
報告者席

国際日本学研究叢書

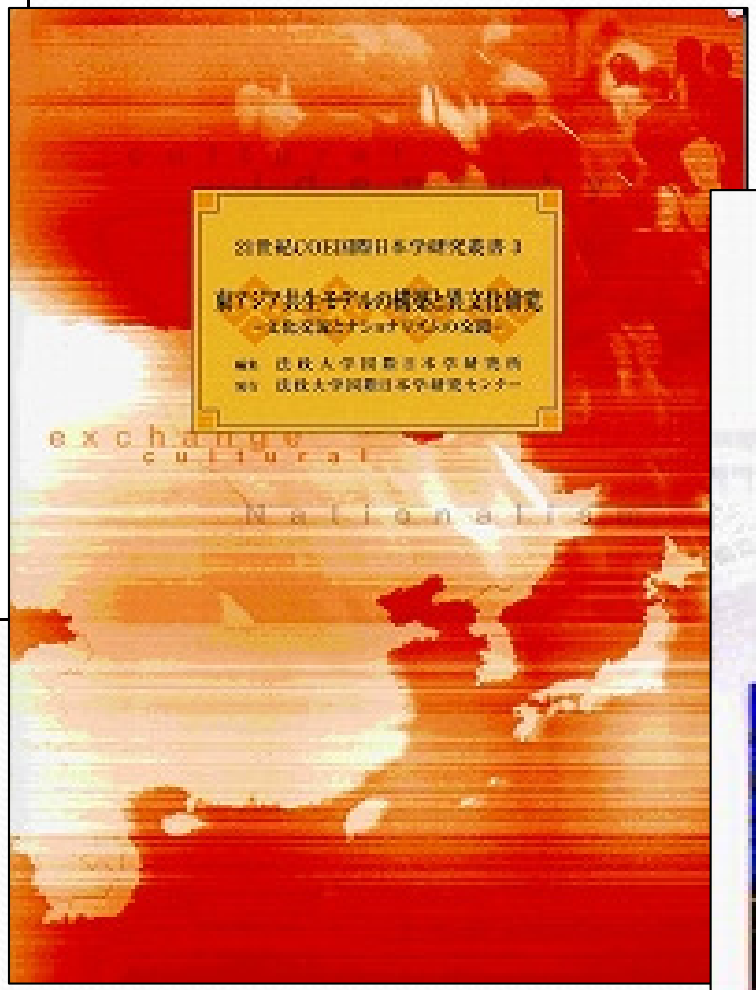
- 外国人の能楽研究
- 国際日本学の構築に向けて
- 東アジア共生モデルの構築と異文化研究－文化交流とナショナリズムの交錯－
- いくつもの琉球・沖縄像
- 相互理解としての日本研究-日中比較による新展開
- 日本学とは何か―ヨーロッパからみな日本研究、日本から見た日本研究―
- 国際日本学―ことばとことばを越えるもの―
- 能の翻訳―文化の翻訳はいかにして可能か―
- 中国人の日本研究―相互理解のための思索と実践―など

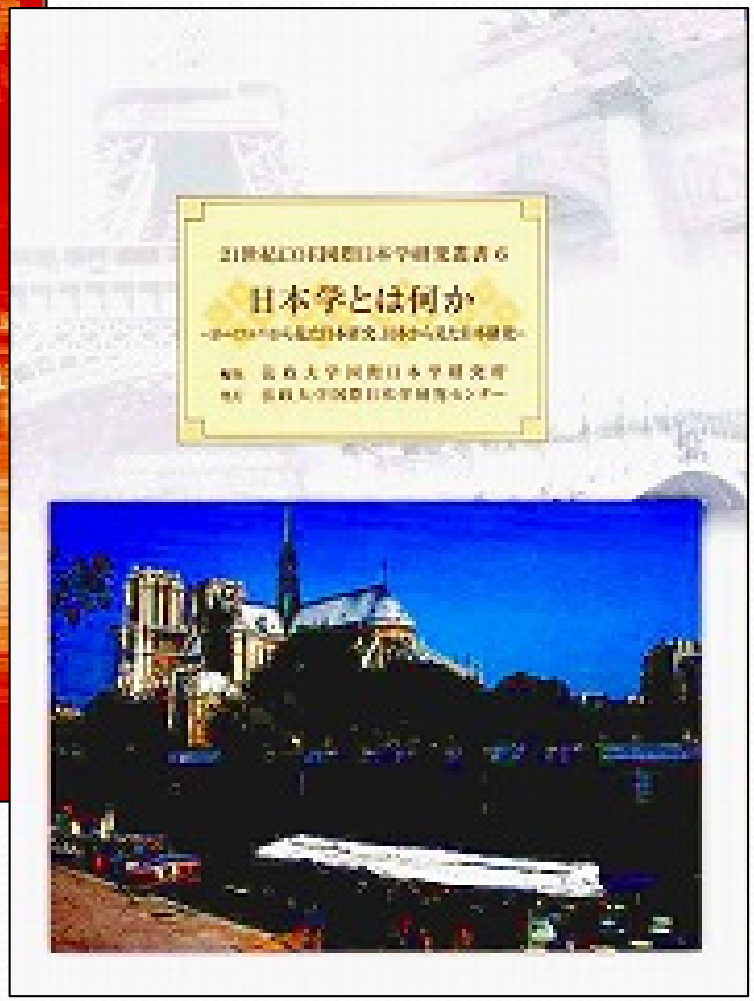
中国における日本研究を中心とした研究論文叢書の出版

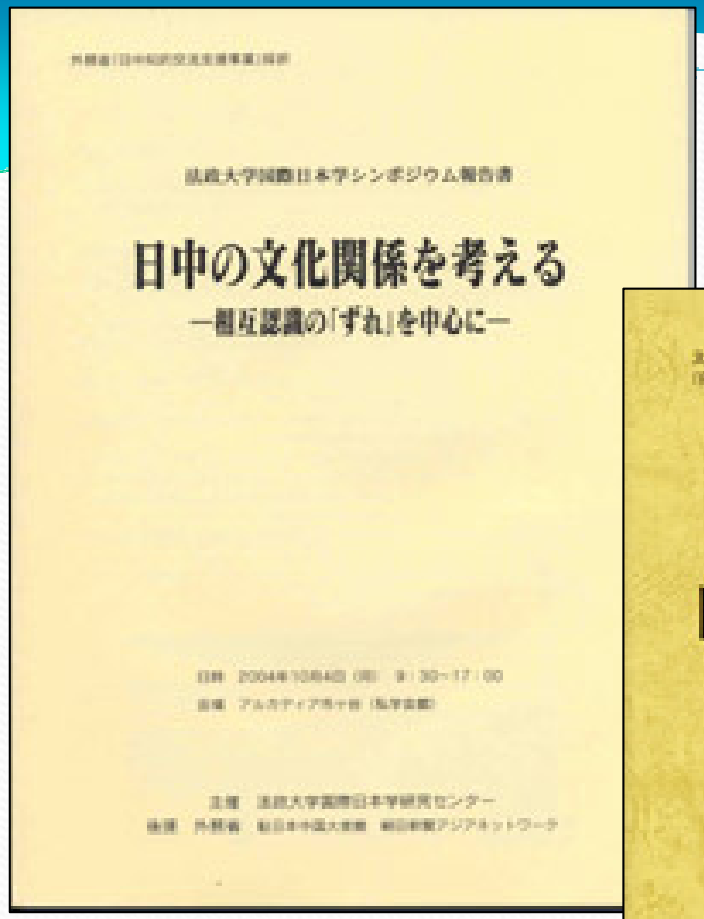


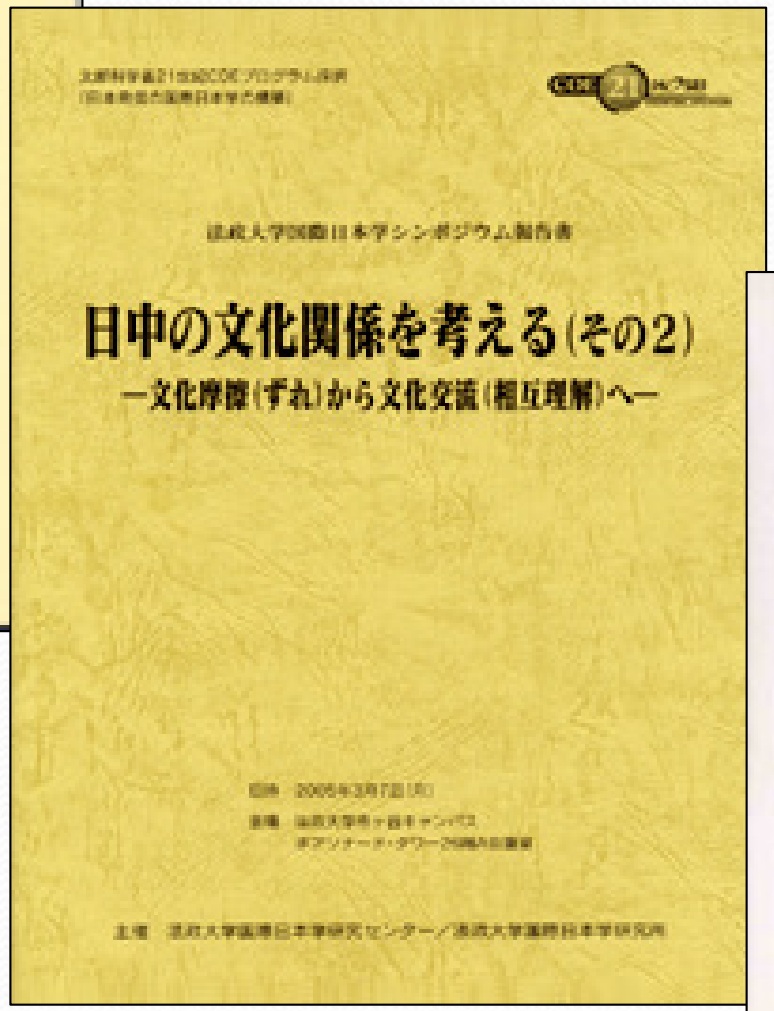


21世紀COE国際日本学研究叢書 2
国際日本学の構築に向けて


21世紀COE国際日本学研究叢書 3
東アジア共生モデルの構築と異文化研究


21世紀COE国際日本学研究叢書 6
日本学とは何か


法政大学国際日本学シンポジウム報告書
日中の文化関係を考える
―相互認識の「ずれ」を中心に―


法政大学国際日本学シンポジウム報告書
日中の文化関係を考える（その2）
―文化摩擦（ずれ）から文化交流（相互理解）へ―

〈意〉の文化と〈情〉の文化
中国における日本研究
王　敏 編著
中公叢書

- ★2002年以来の研究物・本チームの成果として

『国際日本学』第１号
（法政大学国際日本学研究所、200３年3月）
①『相互理解としての日本研究――日中比較の新展開』
（法政大学国際日本学研究所、2007年）

②『国際日本学』第4号
（法政大学国際日本学研究所、2007年3月）

③『国際日本学』第5号
（法政大学国際日本学研究所、2007年4月）

④『日本文化への問いかけ――事例調査及び調査集計結果』
（未公開・2007年4月）

⑤国際日本研究叢書
『中国人の日本観と日本研究――相互理解としての日本研究』
（法政大学国際日本学研究所、2008年）

⑥『国際日本学』第6号
（法政大学国際日本学研究所、2008年4月）

⑦【国際日本学研究叢書9】
『中国人の日本研究――相互理解のための思索と実践――』

⑧【国際日本学研究叢書10】
『異文化としての日本研究――内外の視点の交差――』
(2009年8月刊行)

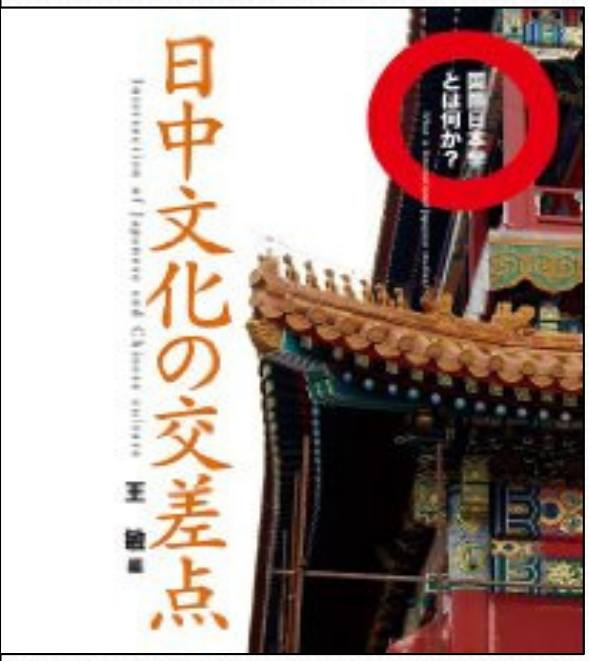
- ⑨【国際日本学研究叢書11】
  『異文化研究としての日本学』 2010年4月
- ⑩【国際日本学研究叢書13】
  『転換期における日中関係論の最前線』 2010年12月

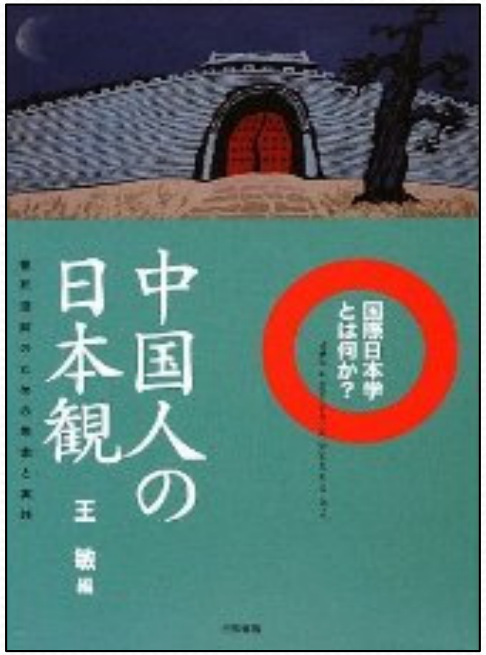
●⑪【国際日本学研究叢書15】
『地域研究としての日本研究—アジアの現在』

2011年10月予定

【市販された刊行物】

- 『日中文化の交差点』(三和書籍、2007年4月)
- 『中国人の日本観』(三和書籍、2009年8月)
- 『東アジアの日本観――文学、信仰、神話などの文化比較を中心に』
  (三和書籍、2009年)

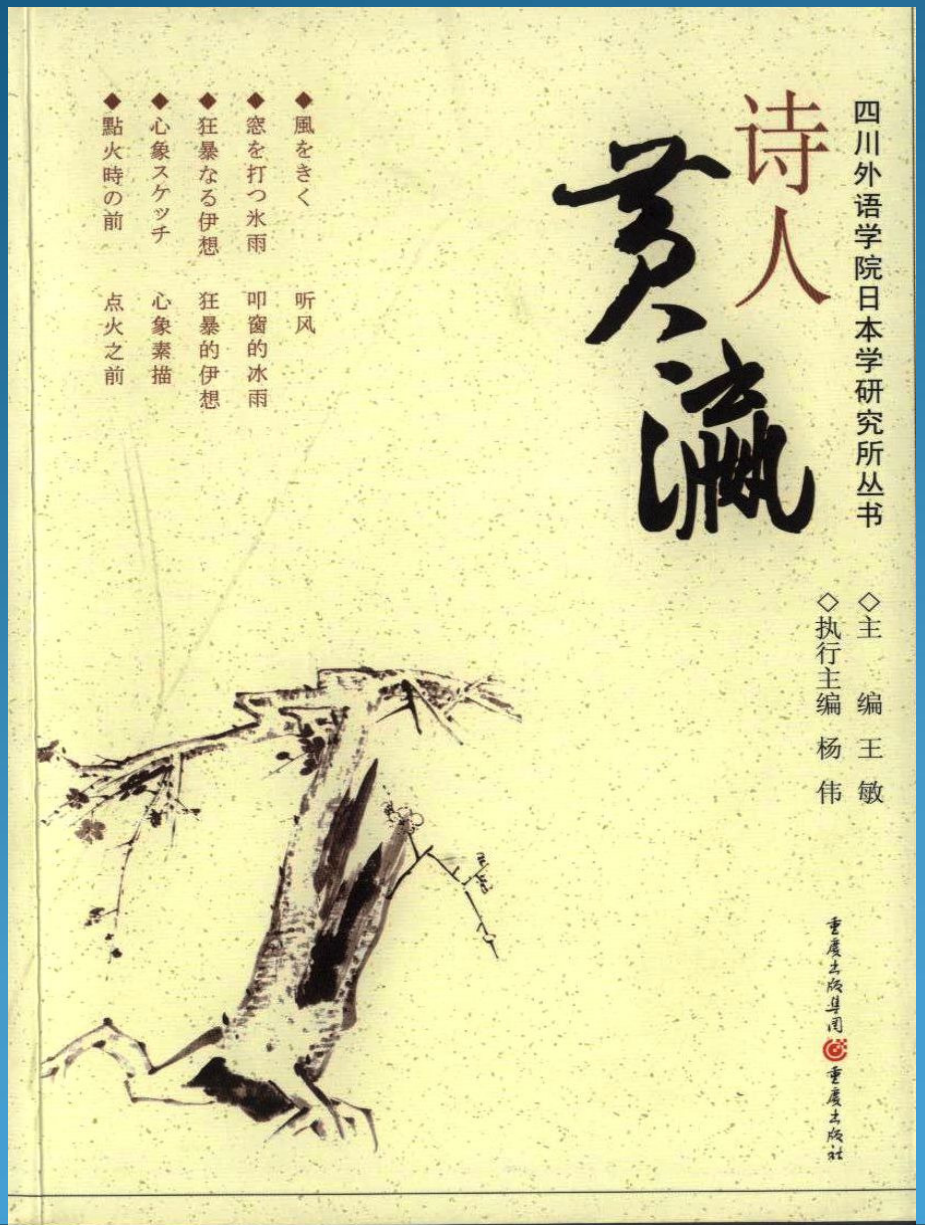


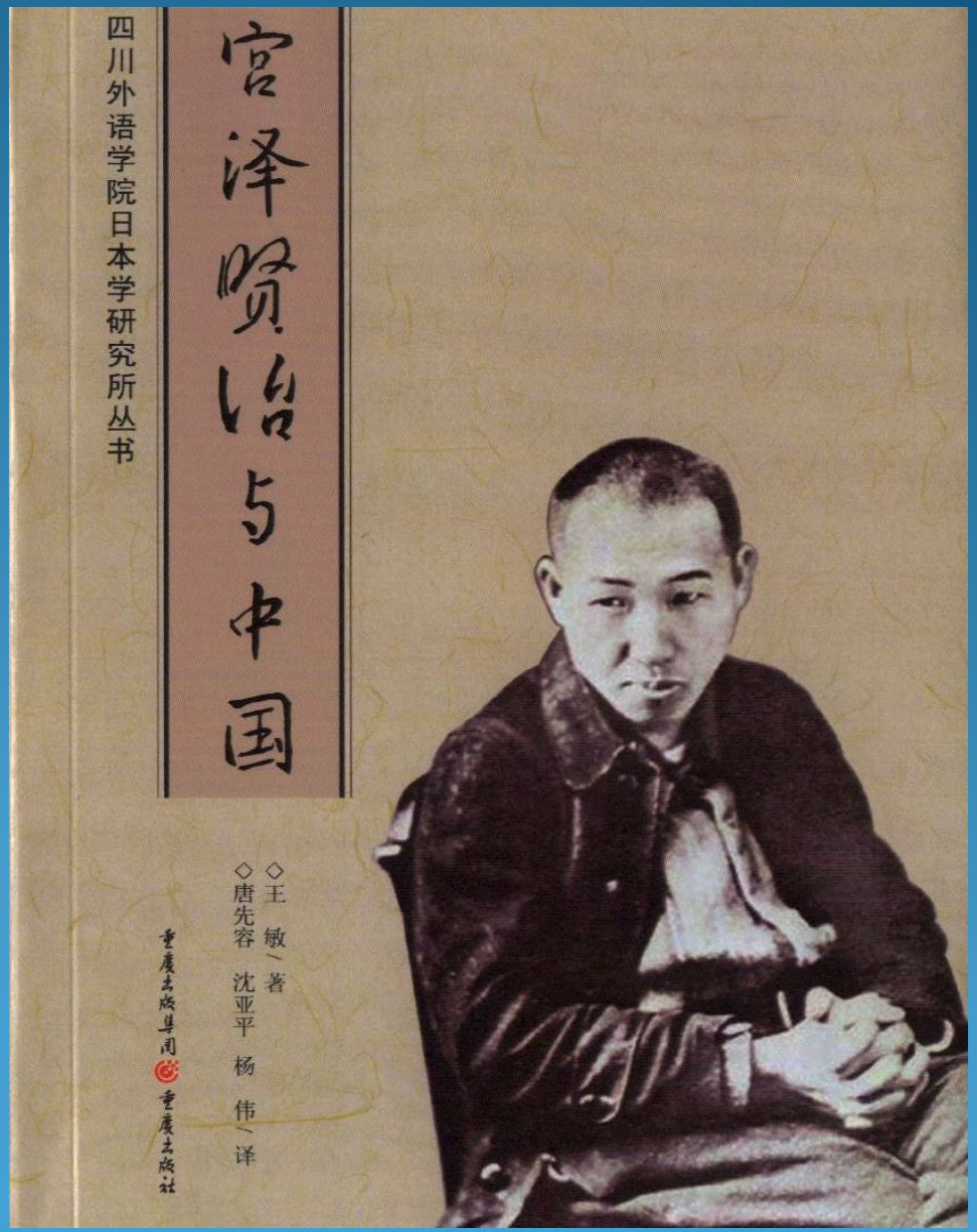


『転換期における日中関係論の最前線ー中国トップリーダーの視点』

三和書籍　2011年2月

中国での出版発信


四川外语学院日本学研究所丛书
诗人芳濑
◇主　编　王　敏
◇执行主编　杨　伟
◆風をきく　听风
◆窓を打つ氷雨　叩窗的冰雨
◆狂暴なる伊想　狂暴的伊想
◆心象スケッチ　心象素描
◆點火時の前　点火之前
重庆出版集团
重庆出版社


四川外语学院日本学研究所丛书
宫泽贤治与中国
◇王　敏／著
◇唐先容　沈亚平　杨　伟／译
重庆出版集团
重庆出版社

生活中的日本
——解读中日文化之差异
王敏 著
王秀文 谢宗睿 赵毅达 译
吉林大学出版社
生活中的日本
——解读中日文化之差异
吉林大学出版社

刊行物の事例紹介
【国際日本学研究叢書9】目次

『中国人の日本研究
――相互理解のための思索と実践――』

目次

コンセプト　王敏

Ⅰ　中国における日本研究の概略

中国の日本研究――回顧と展望――
李玉（翻訳：坂部晶子）

中国の日本史研究――日本研究論者の統計的分析を中心に――
李玉（翻訳：坂部晶子）

現代中国における日本文学の紹介――日本文化の一環として――
王敏

Ⅱ　時代を追う日本観の変容

唐栄詩人の「日本」の想像
葉国良（翻訳：林恵子）

近代における中国人の日本観の変遷
王暁秋（翻訳：王雪萍）

日本留学時期の周恩来の日本観——『周恩来旅日日記』を手がかりに
胡鳴

近代文化論から見た李春生の日本観
　——『主津新集』と『東遊六十四日随筆』を中心に　　徐興慶

20世紀10—20年代中国の教科書に見る日本像
——民国臨時政府——南京政府成立まで——　　徐氷

中国映画の中の日本人像
孫雪梅（翻訳：玉腰辰巳）

Ⅲ　受容された日本の文学と言語

中国近代文学の発生と発展における中日関係――文化交流から生存体験まで（概要）――
李怡（翻訳：及川淳子）

清末民初における日本語文学漢訳題材の特徴を論じる
付建舟（翻訳：小池陽）

五四時期の小詩による俳句の取り込みについての総論
羅振亜（翻訳：金澤妙）

「憂い顔の童子」―森に住む孤独の騎士
許金龍（翻訳：石岡陶子）

僑詞の帰順と近代中日文化の相互作用――「衛生」、「物理」、「小説」を例に――
馮天瑜（翻訳：及川淳子）

Ⅳ　日中文化研究

新しい日本と新しい中国とを結ぶべき紐——陶晶孫『日本への遺書』を読む——
楊剣龍（翻訳：孫軍悦）

新渡戸稲造と日本の文化外交
劉岸偉

中国人の日本における国際理解に関する研究
楊暁文

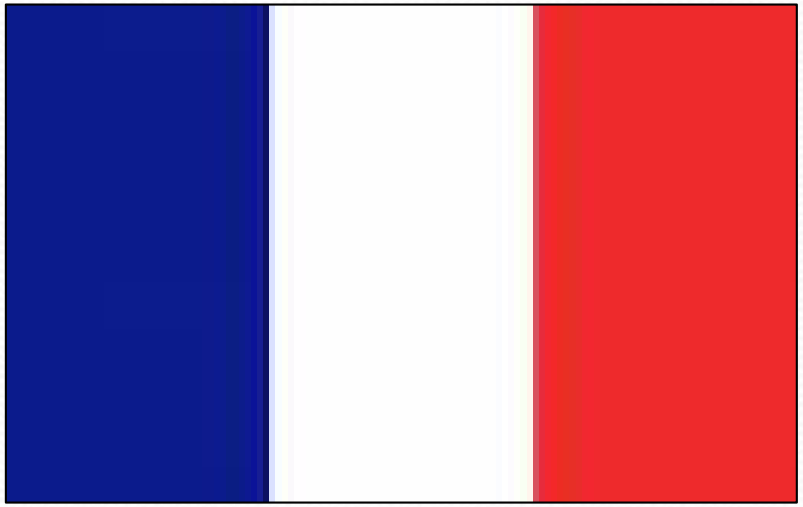
「変節」に寛容な日本的現象——「変節」「転向」考察その1——王敏

転向と向き合う作家・辻井喬論——「変節」「転向」考察その2——王敏

研究活動紹介：内外研究機関との提携、相互学習

- **アンドレ・クライン氏の研究所訪問**
- **2009年5月29日（金）**

フランス、アルザスの古都コルマール近郊キーンツハイムにあるアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）所長アンドレ・クライン氏が法政大学国際日本学研究所（HIJAS）を訪問。

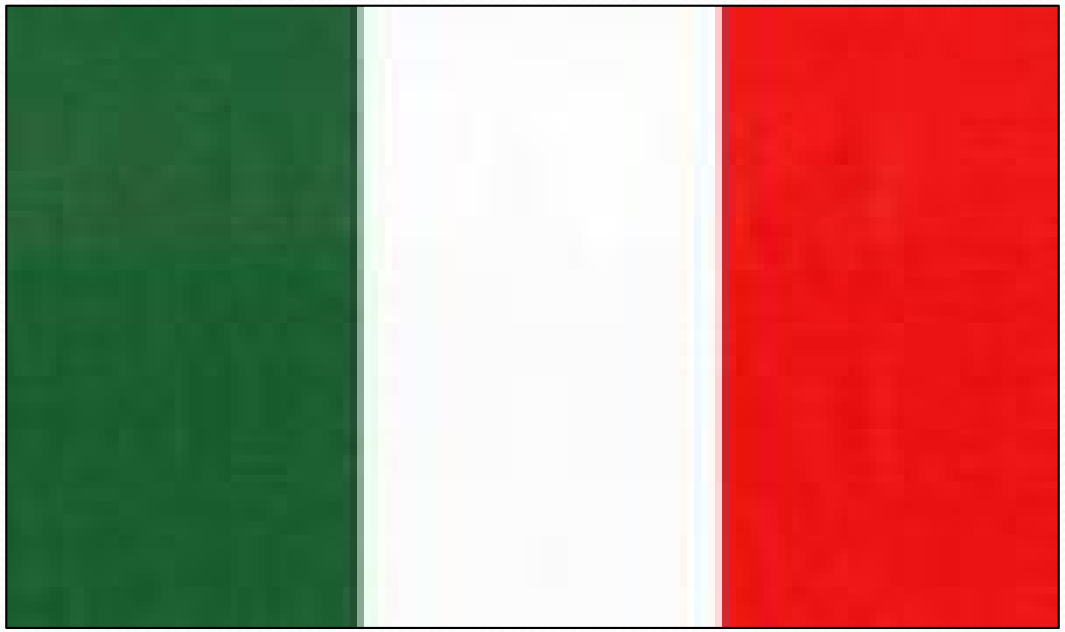


- 王　秀文教授の研究所訪問

- 中国の大連民族学院（大学）国際言語文化研究センター長である王秀文氏が、2009年4月22日に本学を訪問

- ローザ・カーロリ教授の法政大学訪問

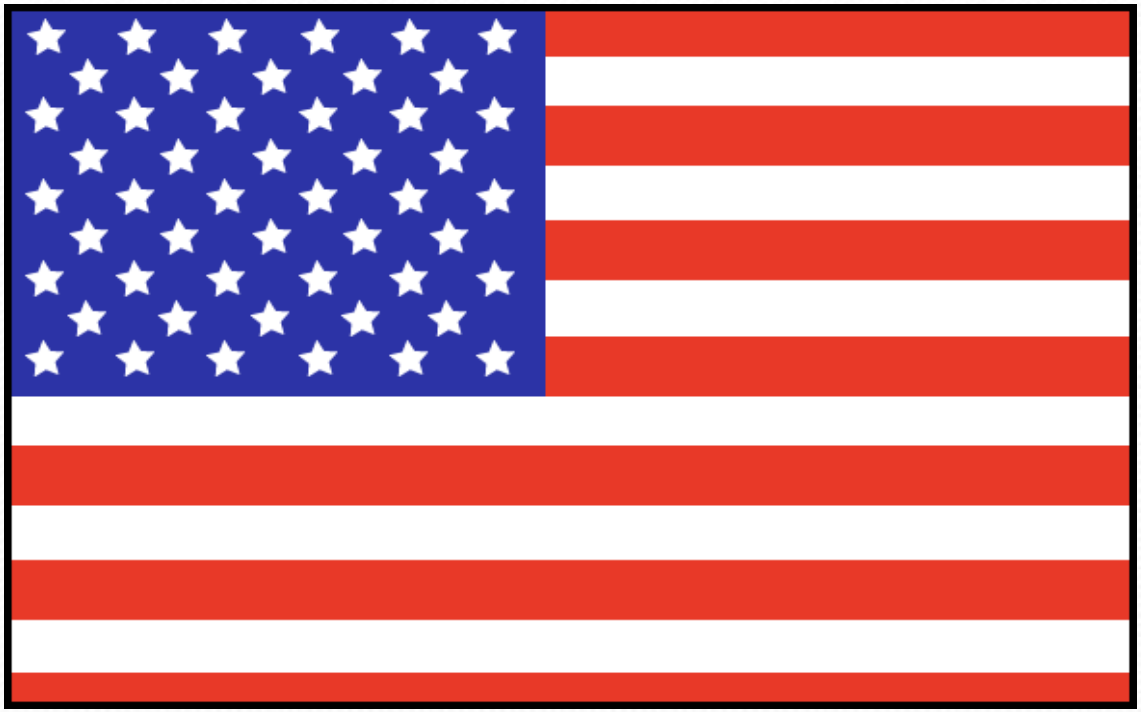
- イタリアのカ・フォスカリ大学東アジア研究所副教授のローザ・カーロリ氏が、2009年3月16日に本学を訪問

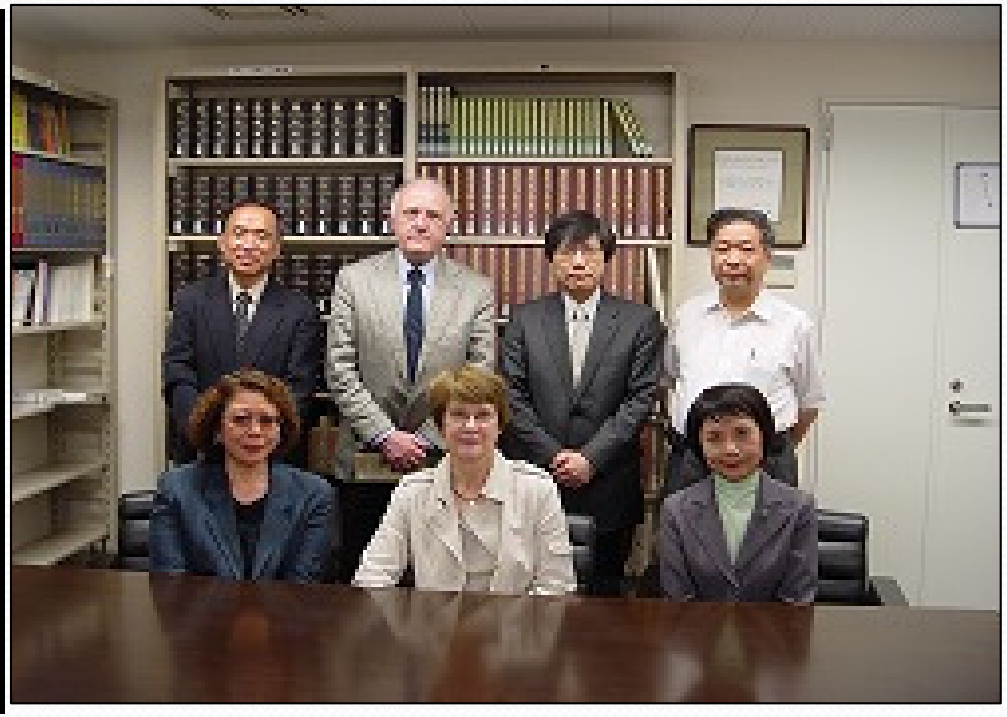


- サイエド・R・アーメリー教授の法政大学訪問

- イラン・テヘラン大学副学長、大学院世界研究科長のサイエド・レザー・アーメリー氏が2009年2月24日、本学を訪問

- ジョーン・ピジョー教授の研究所訪問
- 2008年6月23日（月），南カリフォルニア大学教授で日本古代史研究のジョーン・ピジョー（Joan R. Piggott）教授を法政大学国際日本学研究所にお迎えした





以上が国際日本学研究の一環としての
サブ・プロジェクト②の研究活動報告である

「日本文化への問いかけと解題」を目標に模索、一歩ずつ積み上げていこうという発展途上にある

謝謝！

王敏